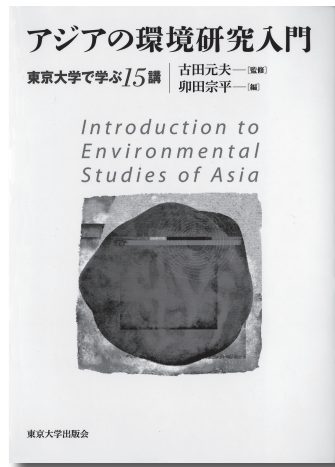


古田元夫監修・卯田宗平編 『アジアの環境研究入門…東京大学で学ぶ15講』

東京大学出版会、二〇一四年



本書は、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（以下、ASNET）による二〇一一年度、二〇一二年度の大学院生向け科目「アジアの環境研究の最前線」の講義の一部をまとめた講義集である。ASNETは学内の学生であれば所属に関わらず自由に履修できる研究科横断型の教育カリキュラムであり、実際にこの講義も多様な専門分野の学生が受講している。講師陣はアジアの環境分野の研究に携わる学内若手研究者で構成され、専門分野は人類学、生態学、社会学、工学、経済学、政治学、毒性学、緑地学、看護学、保健学など非常に幅広い。環境問題という研究対象がいかに多様な側面を持ち、それへの取り組みのために幅広いアプローチが必要であるかを示しているともいえるよう。

本書の刊行の目的は、冒頭の「刊行にあたって」で編者が述べるとおり二つある。第一に現在進行している環境

問題の現実と研究アプローチの多様性を理解してもらうこと、第二に若手研究者の最新の研究成果を一般に公開し、学際的な取り組みをアピールすることである。本書は専門性を十分に維持しながらも、一般の読者に配慮して図表や写真が豊富に用いられ、記述も平易で読みやすい。各章の最後には参考文献だけでなく、さらに知識を深めたい読者のための推薦図書リストも添えられている。以下、簡単に全体の構成を紹介したい。

冒頭のガイダンス「環境研究に『絶対解』はあるのか？」では、生態人類学者である編者が各章の担当者が行っている研究アプローチの全体像の整理を行った。ここでは研究のターゲットを、環境変化の「影響」を受けるもの（生命、健康、人間関係、自然環境など）と、その「影響」の及ぶ「範囲」（個人、家族、村から地球まで）という二つの軸を用いて分類している。さらに序章のタイトルにもあるように、それぞれの環境研究の最終目標が異なることにも注意を喚起している。例えば漁業資源の保護といった複数の利害関係者が複雑に関わる環境問題では、絶対的な目標を設定するのではなく、緩やかな合意形成（文中では「最適解」と表現）を目指すことが目標となりうる。逆に、公衆衛生や水質改善などの研究分野では「絶対解」が存在するかもしれない。このように対象やアプローチによって研究の目標や答えが異なるからこそ、環境研究の難しさであり、面白さでもある。以上の分類を踏まえ、本書は研究対象の違いにより四部に分かれている。

第一部「社会の中の個人」には、環境と人間に関する講義、第一講「トンガ人はなぜ太る？」——人類生態学から考える（小西祥子）、第二講「病は誰が決めるのか？」——精神看護学から考える（宮本有紀）、第三講「環境改善でマラリアは予防できるか？」——保健学から考える（安岡潤子）が収録されている。

第二部「自然の振る舞い」は、自然や生態系を対象とした講義、第四講「なぜ里山の生物多様性を守るのか？」——地域生態学から考える（大久保悟）、第五講「濁った海は汚いのか？」——沿岸環境学から考える（鯉淵幸生）、第六講「人は森林とどう暮らすか？」——環境社会学から考える（田

中求）、第七講「スギは河川の生物にとって『悪者』か？」——河川生態学から考える（加賀谷隆）から構成される。第三部「他者とのかわり」は、自然と人間社会の関係に注目する。すなわち、第八講「国際保健事業とどのようにかわるべきか？」——国際政治学から考える（安田佳代）、第九講「災害に『強い』社会とは？」——労働とジェンダーから考える（荻原久美子）、第一〇講「グリーン・ツーリズムは地域再生に役立つか？」——地域社会学から考える（大堀研）である。

最後の第四部「展開される知」は、環境問題に取り組む技術論を紹介している。第一講「アジアの水は安全か？」——都市環境工学から考える（小熊久美子）、第二講「新しいコンピューティング環境を創造できるか？」——ユビキタス・コンピューティングから考える（鵜坂智則）、第一三講「都市の大気汚染はなぜ解決されないのか？」——都市環境工学から考える（星子智美）、第一四講「どうして水不足が生じるのか？」——サステイナビリティ学から考える（本多了）である。本書の最大の魅力は、若手研究者が生き生きとした語り口で読者を環境研究の最前線へ誘ってくれる点にある。ぜひ多くの学生や一般の読者に手にとって欲しい一冊である。（やまだ ななえ／アジア経済研究所環境・資源研究グループ）